

東京2020メダル獲得の夢へ ザンビア選手を協力隊員が支援



モニカ選手と野崎さん。白皮症のモニカ選手は同疾患に伴うことの多い弱視の障害がある。

2020年の東京パラリンピック出場が決まっている陸上のザンビア選手を、現地で指導した協力隊員がいる。

17年に派遣された野崎雅貴さんだ。学生時代は強豪校でサッカーに打ち込み、卒業後、体育の分野で協力隊員に参加した。

日本は東京2020の参加国・地域を過去最多にすることを目指して、近代的なトレーニングを途上国のコーチ達に伝える取り組みを行っている。18年3月にその一環で開かれたワークショップに参加したのがきっかけで、野崎さんがザンビア選手の育成に関わるように。コーチや選手との積極的な姿勢に心を打たれ、「自分でできることがあるなら」と練習に加わった。

「野崎さんと練習してタイムが縮まりました」と話すのは、陸上400メートル走のモニカ・ムンガ選手。白皮症の彼女は「陸上と出合ったことで、偏見をはねのけ、人生に希望を持てるようになりました。自分が活躍すること、同じ障害のある人たちが勇気づけたいです」と夢を語る。19年2月の国際大会では見事優勝し、東京2020でもメダル獲得に期待がかかる。

ニュース深掘り! 逆境を乗り越える選手たちを尊敬

ザンビアのパラ選手たちが置かれている環境は、けっして恵まれているとは言えません。遠隔地から8時間もかけて練習に参加している選手や、予算不足から用具がなく、普通のスニーカーで練習している選手もいます。また同じ理由から、皆で集まるとの練習も週に1度という頻度です。

しかしそうした環境のなかでも、選手たちは高い目標を持って競技に取り組んでいます。「器具がなくてもできるように」と紹介した自重トレーニングなどは選手たちに非常に喜ばれ、自主練習にも取り入れてくれました。私の帰国の際にはコーチが「日本の指導法がわかってよかった。それを生かして、多くの選手がパラリンピックに出場できるようにしたい」と声をかけてくれました。

障害のある選手たちに心ない言葉を浴びせる人もいましたが、そうした偏見に負けず努力と創意工夫で限界に挑む彼らのことを、深く尊敬しています。2020年のパラリンピックでは、ぜひザンビアの陸上選手たちに注目してほしいと思います。

20年は市ヶ谷の地球ひろばでもスポーツをテーマにした展示を予定しています。派遣期間中に体験した現地の様子もお話しますので、ご来館の際は気軽に声をかけてください。

地球ひろば
地球案内人
野崎雅貴さん
のぞき・まさたか

日本体育大学でサッカー部に所属。大学を卒業後、2017年度から2年間、ザンビア共和国に派遣。19年11月より現職。



JICA HEADLINE NEWS

- 12月6日 | ▶ ケニア、「モンバサゲートブリッジ」建設に円借款
貸付契約に調印。東アフリカ地域の玄関口に架かる橋梁建設により域内経済の活性化に貢献。
- 12月6日 | ▶ ブータン、王立大学にオープンイノベーションの拠点設置へ
同大学科学技術カレッジで「デジタルものづくり工房」を通じた技術教育モデル開発を支援。
- 12月3日 | ▶ 南スーダンの税関近代化に技術協力
手続きの適正化や効率の増進で徴税能力の向上を図る。



◀◀ JICAのニュース&トピックスをもっと読みたい方はアクセス!
<https://www.jica.go.jp/information/index.html>